

● 北 陸

山 田 正 幸

富山県氷見市では昨年10月氷見市芸術文化館（800人）がオープンした。中庭に野外コンサートもできる青空広場をもちその回廊にはフリー WiFiも出来る、鏡付きマルチスペースもあり新しい氷見市民の憩いの場にもなった。本年から本格的に公演を行う、辻井伸行&オーケストラ・アンサンブル金沢（以下OEK）、中村勘九郎の歌舞伎等等いずれも超満員の盛況、また氷見小中高生30名によるオリジナル音楽劇「イヤサー！舞つなげ、氷見の声」は地域おこし協力隊の指導も得て氷見市の歴史を感動的な舞台を作った。

また富山市のオーバードホール（2196人）では中ホール（652人）が新設オープンした。本格的なオペラ、ミュージカルは大ホールに、手軽に自由な舞台も作れ観客に臨場感あふれる公演は中ホールに。7月の柿落し公演には坂東玉三郎x鼓動による「アマテラス幻想」を富山オリジナル制作。小曾根真とそのバンド、落語、バレエ等等。数多くの多彩なプログラムに地元アーティストも入れ、市民に（ちょうどいいホール）として文化に楽しめる場所が出来たのである。

福井県の文化振興の中心「ハーモニーホールふくい」では「越のルビープロジェクト」としてフルート大久保彩子が初めて「おと・ラボ」として新しい音楽をキッズや赤ちゃんを中心にして制作実験して、創造性を追及する現場を披露した。

また武生国際音楽祭は34年目を迎えた。2001年から細川俊夫が音楽監督に就任。越前市文化センターをメイン会場にして、約10日間コンサートや作曲ワークショップ、ピアノ公開レッスン等夏季アカデミーとしても開催。国際作曲ワークショップには細川俊夫、伊藤恵プロデュースコンサートにはトリオ、弦楽四重奏、ピアノ五重奏等、最終日には鈴木優人指揮によるバッハ:カンタータを武生国際音楽祭フェスティバル合唱団（約70名）が出演、盛り上げた。今年の公演の出色はスカンジナビア出身のギターリストジェイコブ・ケラーマンが細川俊夫氏に委嘱した「日本のうた」の日本初演である。これは童謡唱歌等「春の小川」～「江戸の子守唄」（全11曲）を四季を感じさせながら配列、古典から最先端の音楽までの色合いが漂ってくる。この音楽祭は細川俊夫氏によって武生を「東洋と西洋の音楽文化が出会う重要な街」へと発展させている。近々新幹線も着くことも新しい観客を呼び込み今後の発展に期待したい。

石川県では2023年は「いしかわ百万石文化祭」第38回国民文化祭・第23回全国障害者芸術・文化祭を開催。期間10/中旬～11月末。全151事業（県主催事業31、市町村事業113、特別連携7）来場者1,284,933人の盛況。総合ディレクターは狂言師・野村萬斎、今回は多様な文化に触れて「生きる喜び」を体感して欲しいと伝統芸能の継承と未来、日本文化の魅力を存分に網羅し「文化絢爛」を演じたのである。そして池田晋一郎によるOEKへの委嘱新曲「豊穰の道」を指揮広上淳一で華を添えた。また金沢が生んだ鈴木大拙の生涯を演じるオペラ「禅・ZEN」は指揮ミシェル・バルケ、大拙：伊藤達人、西田幾多郎：宮本益光、大拙の妻ビアトリス：コロンえりか、脚本：松田章一、

作曲：渡辺俊幸、演出：三浦安浩、金沢オペラ合唱団。演奏：OEK 禅の思想「あるがままに、」を實力派歌手達の歌唱力、地元合唱団の熱演を生かした演出力は好評。

北陸唯一のプロオーケストラであるオーケストラ・アンサンブル金沢の全114回公演はコロナ禍の以前に戻った感である。地域を回るオーケストラキャラバンも意外な会場で行った。鹿児島県喜界島公演である。指揮碓山隆一郎は当地の出身者、オーケストラが初めてこの島に登場したのである。オーケストラ・ベートーヴェンの響きとその生の魅力に素朴に驚きと感動を1/10島民は感じたのである。まだまだ文化が浸透していない地もある事を痛感。

ゴールデンウィークの音楽行事というよりは地域の行事となった感のある「風と緑の楽都音楽祭」は“東欧に輝く音楽”をテーマにレオシュ・スワロフスキー率いるチェコのヤナーチェク・フィルを招聘。小林研一郎/群馬交響楽団と広上淳一/OEKと国際色豊かに開催された。ウィーンチェロ・アンサンブル、ハンガリー声楽アンサンブル、ヘルシンキ合唱団等、また気鋭の指揮沖澤のどかの充実した指揮ぶりも見られた豪華版であった。オペラ「売られた花嫁」から、,、「新世界」まで180公演 観客10万人を超えてようやくコロナ禍を脱したのである。